

ずいそう



米国多発テロで思うこと

林 田 紀久男

先日ある米軍基地の中で炭疽菌騒ぎが発生しました。地盤改良工事が施工されていた時の事です。騒ぎは基地内のアメリカ人が「何か白い粉が空から降って来ているぞ。もしかして炭疽菌じゃないか」これは一大事と防毒マスクを装着したMPや化学班が出動し、白い粉の飛んできている方向を探しやっと施工中の現場に辿り着いた。

「何だこの白い粉は」

「路床を強化する地盤改良の添加剤です」

「添加剤の成分は何か」

「石灰です」

「……」

「判りやすく言えばテニスコートや野球場等グラウンドの白線に使うものと同じです」

やっと騒ぎは治まり安堵致しました。

勘違いだったとは言え、一時は関係各方面の方々に大変なご心配を掛けたようです。炭疽菌に対してアメリカ人が過敏に反応することは、アメリカ本土で起きている事件をいかに深刻に受けとめ、心を痛めているかを察することになった1件でありました。

米国同時多発テロが発生したその日は、私は夕方から間近に迫った、道建協の欧州技術調査団の、準備打合せの日でした。帰宅と同時に、テレビのニュースで、ニューヨークの世界貿易センタービルに、航空機が衝突して炎上している様子が映し出されていました。何事が起きたのかと、驚いて見ていると、二つ目のビルにも、また航空機が衝突し、炎上するのをリアルタイムで見て、これは事故ではない、何かすごいことが起きたなと興奮しました。それが同時多発テロであることが報じられ、世の中、先々に何が起きるか、予見予知の難しさを、つくづく思い知らされました。当然のこととは言え、調査団は団結式の日、急遽、中止を決定し、解散式になりました。準備に奔走された団員と事務局の方々には、団長としてねぎらいの言葉をかけるのが精一杯でした。

その後の社会の変化や、世界の経済や人々の暮らしに対して、大きなマイナス影響を与えていることを考える時、驚きと共に、テロに対する怒りを覚えています。テロリストやそれを支援する者は、壊滅されなければなりません。今回壊滅しても、再発防止を考えるならば、弱者への配慮を如何にすれば良いのかも、全世界で考えねばならないのではないかと考えています。いろんな民族の文化の違い、宗教の違いで争いが続き、平和でない地域のことを考えると、日本には民族や宗教の争いもなく、平和な国であることの、有り難さをつくづく感じています。

私は日本の古代史に以前から興味を持っており、邪馬台国や卑弥呼をめぐる、いろんな論客の本を読んで、想像力を膨らませています。当時でも想像以上に船を使った流通が盛んであったと思われ、卑弥呼九州説、近畿説がありますが、卑弥呼はどちらにも滞在することが出来る状況の中での、連合体における、調整神のような立場の、君主だったのではないかと想像しています。

稲作伝来後の、弥生時代の地域活性化改革は、鉄の輸入から始まったと思います。やがて日本海ルートで鉄の製法を先行取得し、勢力を強めた出雲北陸グループと、瀬戸内海ルートで九州から近畿まで、連合の進んだ邪馬台グループの、大きな争いがあり、ヤマト（邪馬台）グループの各首族長（神々）が、出雲に集結（神無月）し、平定後の出雲の首族長の扱いについて調整し、崇りを恐れて、神として特別に祀ることにしたのが出雲大社であり、大国主命の国譲りの神話ではないかと想像しています。日本人の宗教心と言えるかどうか、人の心の根底には崇ることを恐れる伝統的な心があり、このことは「祓い給え清め給え」の神事にも窺えます。日本人は神社に参拝する。やおよろずの神々や仏閣にも手を合わせる。まことに宗教というものに自由な国である。崇りを恐れる思想が、争いよりも調和を以て尊しとなす、風土を造りあげたのかもしれませんが。世の中の仕組みに調整する手法を感じる時があるのは、日本特有の風土が創り出したのかもしれませんが。

今、構造改革や規制緩和を推進する、小泉内閣への抵抗する強い力の根底にあるのは、この日本民族の風土文化かもしれません。

すべての者に機会の平等を与えること（規制緩和）と結果責任は各人に求める（市場原理の競争）ことは優れた者が勝つ社会、敗者が発生する社会であり、これを容認するか、しないかを問われています。世界に通用して勝てる日本にするか、しないか、の問題でもあります。日本という国は、いろんな面からすばらしい国であると思っていますし、将来もそうであり得るためにも、勇気をもって、日本民族の精神的風土文化を変えるべき、正念場でもあろうかと思っています。